

可変性の原理

ディドロのコント三部作

田口 卓臣

はじめに

ディドロは1770年代前半に『これは作り話ではない』、『ド・ラ・カルリエール夫人』、『ブーガンヴィル航海記補遺』（以後『補遺』と略記）のコント三部作を著した。それらの作品のうち後二者において、気象の話題が取り上げられている。

例えば『ド・ラ・カルリエール夫人』は、二人の匿名の人物の、以下のような対話で幕を開ける。

そろそろ帰りませんか？——まだ早いですよ。——しかしあんなに厚い雲が出ていますよ。——心配しないでください。あれはおのずと消えてしまうでしょう。ほんのちょっとした風が吹かなくてもね。——本当にそう思いますか？¹

また『補遺』の第一章の冒頭では以下のような対話が展開する。

A：昨夜家路に着いた時には、あの素晴らしい星空を見て翌日は晴れるだろうと確信したものでしたが、結局のところ予想は外れてしまいましたね。/ B：どうしてそんなことが分かるのですか？/ A：霧がととても濃くなっていて、近くにある木々も見えないほどだからです。/ B：そうですね。しかしもし、この霧が大気の下の方に残っている理由が、大気が十分に湿気を含んでいるというだけのことだとしたら？そして霧は地上で消えてしまうのだとしたら？/ A：しかしもしその逆に、この霧が海綿質になって、もっと大きくなるとしたら？そしてもっと空気の薄い、化学者たちが言うように飽和しえないような高い場所にまで到達してしまうのだとしたら？/ B：結論を出すには待ってみなければなりませんね²。

¹ Œuvres Complètes de Diderot, Hermann (以後DPVと略記), XII, *Madame de la Carliere*, p.549.

² DPV, XII, *Supplément au Voyage de Bougainville*, p.579.

前者の雲も後者の霧も、それらが消えてしまうのか、それともさらに勢いを増していくのか、つまりこの先どのように変化していくのかがはっきりしないといみなされている点で共通している。

なるほど『ド・ラ・カルリエール夫人』の締め括りでは、「雲は消えてしまうでしょう」という冒頭の予告が的中する様が描かれるし、『補遺』第一章・第五章の各末尾では「霧は地上で消えてしまう」という B の判断が正解だったことが判明する。少なくとも予告をした人物たちにとって、気象の行く末は不明ではなかったのだ。実際『ド・ラ・カルリエール夫人』において雲の消失を言い当てた人物は、引用した冒頭部分に続く箇所、自らの気象観察の体験談をまじえながら、大気、湿気、雲などといった研究対象への深い造詣を示している。豊かな観察眼と経験知を持つ彼にとって、雲の消失は必然的帰結であった。しかしそうであるにしても、気象がどのような変遷をたどるかという過程・因果に関する決定的な解は、それが実際に現象として明らかになるまで「待ってみなければならぬ」。この『補遺』の対話者 B の判断（精確に言えば、判断を一旦宙づりにしなければならぬという判断）は、そのまま『ド・ラ・カルリエール夫人』の観察力ある人物にも妥当することなのだ。

以上のような、気象に関する対話者たちのやりとりは、コント三部作に一貫して見出される可変性の主題と密接に関わっている。この主題は作品の様々なレベルにわたって浸透していると思われるが、本論考では、内容上最も顕著な、愛の可変性というテーマについて検討していきたい。その作業を通じて、なぜ二つの作品の冒頭部に雲や霧に関する記述が導入されたのかが明らかになっていくことだろう。これらの気象学的対象は、定まった形を持たず、時々刻々と多様複雑なしかたで変化を遂げていくものである。それを前にしては何らかの本来のありようを読みこむことも、将来における変遷の過程を予測し尽くすことも、等しく不可能に近い。実際だからこそ、雲や霧がそのうち消えるのか否かについての対話者たちの判断は二分されることになったのであり、そしてその結論は作品の末尾に至るまで先おくりにされざるを得なかったのである。コント三部作の諸々の主題が可変性に関わるとする私たちの仮説からすれば、こうした気象の話題が、作品自体の抜群の寓意となり得ることは想像に難くない³。

³ 気象のテーマがコント作品の根幹に関わっているとの指摘は、既に以下の研究においても先駆的になされている。Jacques Proust, *Introduction de Quatre Contes*, Textes Littéraires Français, Genève, Librairie Droz, 1964. Voir aussi Laurent Versini, «Introduction

愛、正義、交換——『これは作り話ではない』

三部作の第一作『これは作り話ではない』では、二人の匿名の人物たち（語り手と聴き手）の対話を通して、主に二つのエピソードが順番に紹介されている。一つめのエピソードではタニエとレーメル夫人という一組の男女の愛が、二つめのエピソードではド・ラ・ショー嬢、ガルドウイユ、ル・カミュ医師という三人の男女の愛が描かれる。それらのどの男女関係においても明らかに共通しているのは、一方が他方に対して過剰なまでに献身的であると同時に、そうした一方的な贈与を受け取る側はそれを冷めた態度で遇しているという点である。

例えば語り手によって最初に紹介される男女の、露骨に一方的な授受の関係は次の部分で提示されている。

タニエはレーメル夫人に惚れこみました。そして自分の勇気を支え、自分の全ての行いを高貴なものと実感させてくれる情熱に興奮していました。だから愛する女の窮乏を減らすためには、最も辛いことや最も賤しいことも、嫌がりもせずに夢中でやりました。彼は日中は港へ働きに行きました。日が沈むと往来で物乞いをしました⁴。

タニエがここまで自己犠牲的になれるのは、いうまでもなくレーメル夫人から愛されたいためである。彼にとって、自分が愛されているという実感を得さえすれば、贈与に対する見返りを受けていることになるだろう。しかし彼の熱中ぶりに比べてレーメル夫人が冷め切っていることに注目しなければならない。実際、タニエが昼夜を問わずに稼いでいる時、レーメル夫人は「乞食のタニエをどこかへ追いやってしまうようにせかす裕福な男たちにしつこく言い寄られていた⁵」。そして、より多くの富を彼女に貢ぐべく植民地で仕事することをタニエが決意した時、彼女はそれを歓迎する。のみならず夫人は、彼の出発後間もなくすると複数の男たちと関係を持ち、しかも彼が植民地から贈ってくる莫大な財産を以前同様に受け取り続けるのである。

その次に紹介される男女も、微妙な差異はあれ似たような関係性の中にある。

彼女は自分の親戚を捨ててガルドウイユの腕の中に飛びこみました。ガルドウ

des Contes », dans Diderot: *Œuvres (contes)*, tome II, Robert Laffont, Paris, 1994, p.465.

⁴ DPV, XII, *Ceci n'est pas un conte*, p.523.

⁵ *Ibid.*, p.524.

イユは何も持っていませんでした。ド・ラ・ショー嬢はいくらかの財産を持っていました。そしてこの財産はまるごとガルドウイユの必要や気まぐれのために捧げられました。彼女は財産が浪費されても、名誉に傷がついても後悔などしませんでした。恋人こそが彼女にとって全ての代わりだったのです⁶。

さらにド・ラ・ショー嬢は、健康を害したガルドウイユの仕事を助けるべく、ヘブライ語、ギリシャ語、イタリア語、英語を次々と習得し、彼の代わりに翻訳や書写の作業を引き受ける。その結果、過労のあまりにやせ細り丹毒症状が出るほどにまで衰弱するのだ。ところが、自己の全てを犠牲にして愛情の徴を与え続ける彼女に対して、ガルドウイユは冷酷な態度を取る。彼は、彼女の示した献身が申し分なかったことを認める一方で、自分でも理由は分からぬながら彼女への愛情を全く失ってしまったことを宣告する⁷。

タニエもド・ラ・ショー嬢も、恋人に対して非常に忠実であると同時に、自分の愛の証拠を徹底的に示し続けようとする。その報いとして彼らが求めているのは、その要求の強度に差はあれ、相手からの愛情の証拠であり、自分が相手の愛人であるということを信じられる状態であるに過ぎない。こうして第三者の目からみれば一方的に・過剰に贈与している彼らの立場も、彼ら自身の目にとっては少なくとも報われているといえるのかもしれない。

対照的に、レーメル夫人もガルドウイユも、恋人から贈与され続ける愛の証拠に対して報いようとはしない。なるほど前者が専ら富を追求する打算的性質であるがゆえに男を見る目が冷めているのに対して⁸、後者は単純にド・ラ・ショー嬢に飽きてしまったという差異が存在している。しかしいずれにせよ、愛などはいつか必ず冷めるということが彼らの思考の前提になっている。図式的に整理すれば、タニエやド・ラ・ショー嬢が、愛情の恒常的な不

⁶ *Ibid.*, pp.531-2.

⁷ ガルドウイユとド・ラ・ショー嬢の間では次のようなやりとりがなされる。「あなたに対する愛情は私の心の中で消え失せてしまいました。(中略)」「どうしてもう愛してくれないのか教えてください。」「どうしてなのか私にも分かりません。私が知っていることといえば、なぜなのか理由も分からずにあなたへの愛情をなくし始めたことであり、そしてあの情念が再び戻ってくることは不可能だと自分が感じていることだけです。」(*Ibid.*, p.537)ここでのガルドウイユの言葉は、愛の可変性の、ひとつのあり方を簡潔に表現している。

⁸ レーメル夫人は、タニエに金を貢がせる一方で、一万五千リーヴル以上の年金を得ており、しかもその事実をタニエには隠していた、ということが対話の中で語られている。「Je puis vous assurer, moi, sans avoir compté avec la Reymer, qu'elle avait mieux de quinze mille livres de rente avant le retour de Tanié. – A qui elle dissimulait sa fortune? – Oui. – Et pourquoi? – Parce qu'elle était avare et rapace. » (*Ibid.*, p.526)

変性に固執する人物であるのに対して、レーメル夫人やガルドウイユは、愛情の変わり易さやその性質の不可避性を表象する人物たちなのである。

ところで前二者、特にド・ラ・ショー嬢の常軌を逸した献身ぶりには、ある種の論理が隠されている。その論理は、彼女がガルドウイユに棄てられた時に取り交わされた二人のやりとりを通じて顕在化する。

「私の落ち度は何だったのですか？」あなたに落ち度は全くありません。「私の振る舞いに対してひそかに何らかの反感を抱いているのではないですか？」反感など少しも感じていません。あなたは、ひとりの男が望むことのできるなかでも最も貞節で、最も優しく、最も誠実な女性でした。「私にできることで何か私のやらなかったことがありますか？」全くありません。「私はあなたのために両親をも犠牲にしなかったでしょうか？」その通りです。「私の財産は？」そのことについては遺憾です。「私の健康を犠牲にしなかったでしょうか？」そうかもしれません。「私の名誉は？私の評判は？私の安息は？」あなたの挙げたいあらゆるものが犠牲にされたことでしょう。「そして私はあなたにとって不愉快な存在なのですか？」⁹

一貫して淡泊な反応を示すガルドウイユを前にして、ド・ラ・ショー嬢がここで固執するのは、自分があれだけ多くのものを与えたのだから相手も愛情を返してくれて当然だという正義の論理である。彼女が愛情の徴としての過剰な贈与を施すことのうちには、それによって相手に負債を負わせ、その負債の代償として相手から返済されてくるもの（愛情の報酬）を受け取る権利がある、という主張・要求が不可避的に内在していた。

ところでこのような正義の論理が、彼女の愛のやぶれた後で、引用のような畳みかける口調とともに噴出したという事態には注目しておく必要があるだろう。ガルドウイユに対する過剰なまでの献身に邁進していた時、彼女はそのような論理を自覚していただろうか？ 実際、ガルドウイユをめぐるそのヒステリックな振る舞いについて、世間に流れる噂にいらだった家族から迫害を受けていた時、「彼女は幸せだった¹⁰」。自らの愛が成就している（と信じている）時、彼女の念頭に正義の論理は浮上していないのである。「彼女は財産が浪費されても、名誉に傷がついても後悔などしませんでした¹¹。」要するに、相手に与え過ぎたにしても彼女自身はそのことに満足していた。と

⁹ *Ibid.*, p.538.

¹⁰ *Ibid.*, p.534.

¹¹ *Ibid.*, pp.531-2.

ころが愛が終わった（と気づいた）時、突如として正義の論理が頭をもたげ、引用のような対話が展開されることになったのだ。

ド・ラ・ショー嬢において愛と正義とは、同時に並存するものではない。その意味で二者は互いに相容れないものであるとも考えることができる。しかし他方、事後的なしかたで正義の論理が顕在化したことを考えれば、彼女が自分の「全て」を投入していたはずの愛（したがって少なくとも彼女の内では純粋なものとして認識されていたはずの愛）には、潜在的に正義の論理という不純な媒介項が混入していたことになる。とするなら、彼女の愛の内実がいったいどこまで打算に裏づけられていなかったのか、にわかに疑わしくさえてくるのだ。正義との間に曖昧な境界を持つ、こうした愛のとらえがたさは、作品『これは作り話ではない』から読みとれる重要なメッセージのひとつなのである。

ところで愛のとらえがたさという主題は、ド・ラ・ショー嬢の描写にばかりではなく、タニエの人物像のなかにも別の形態のもとに見いだすことができる。彼は、レーメル夫人のもとを去って植民地に赴くとき、次のようにいう。

この地球上のどこの国に住むことになろうと、私の愛情のこもった献身の確たる証拠をあなたにお贈りできずに一年間が過ぎるとしたならば、私はほんとうに不幸になってしまわざるをえないでしょう¹²

彼は、自分の愛情の「証拠」として送金をし続けるのだが、そのことによって「愛されている、あるいは愛されていると信じる¹³」状態を確保しようとするのだ。ここでタニエの振る舞いは、例え語り手の目には「純粋な」と映っていたにしても¹⁴、端的にいえば相手の愛を買おうとしていることを意味する。「自由、意志、欲望」を持つ「物」（＝人間）の愛とは、交換関係のなかに置きえないものであるとする、コント三部作の第三作『補遺』の定義に従うならば¹⁵、このタニエの試みは「自然」に反しているとみなすこと

¹² *Ibid.*, p.524.

¹³ *Ibid.*, p.524.

¹⁴ *Ibid.*, p.526 : «une âme aussi pure que celle de Tanié»という言葉を送り手は口にしている。

¹⁵ DPV, XII, *Supplément*, p.604: «la chose qui ne s'échange point, qui ne s'acquiert point, qui a liberté, volonté, désir.»厳密にいえば、ここで人間は「交換」できないものとしてだけでなく、「獲得（所有）」できないものとしても定義されている。愛と所有、ないしは占有 *propriété* の関係については本論考の後半部で分析する。

ができるだろう。売り-買いの関係性において把握することができないもの、言い換えれば、数値化された商品としては捉えられないものが、愛なのである。そしてタニエは、意識するしないに関わらず、その不可能なことを実践しようとしている。

ところが皮肉なことに、タニエが不「自然」にも売り-買いの関係のなかに置こうとした愛は、翻って経済的な視点から眺める時、レーメル夫人の承認と満足を引き出していると考えることができる。というのも、彼女は「豪華さと富に対する愛¹⁶」に支配されている人物だからだ。「彼女は吝嗇で強欲であった¹⁷」ので、莫大な蓄財をしていた。夫人は、他の裕福な男たちから貢がれる財産と同様に、タニエから贈られる富をも拒まずに受け取っている。その結果として、少なくとも一定期間、タニエは自分が彼女の愛を受けていると信じることができたのだ。ここではある意味で何も「交換」されていない。しかしタニエが金によって愛への信を手に入れたという点で、何らかの「交換」（「交換」の相互承認）がなされてしまっているのである。なるほど「交換」関係の主体である二者の意図が、必ずしも同一平面上にあるわけではない。しかし互いがそれを通じて互いの思惑の中で満足しているという意味において、いずれそのずれが顕在化することになるのだとはいえ、その「交換」のなされている時点では支障はなかったのだ。そして、まさしくこのような複雑で微妙な事態を引き起こすところに、愛の不可思議さが見出されるだろう。

さて、与えることによって負債を負わせようとしたタニエやド・ラ・ショー嬢の貞節ぶりは、レーメル夫人やガルドゥイユによって冷淡に斥けられてしまった。後二者は、変遷する自分の愛情や好意（レーメル夫人の場合それは打算に由来する）にあくまでも率直に従ったに過ぎない。また彼らにとって、そのようにいつ変化してもおかしくない類の情念を、強制的にひとつの対象へと縛りつけられることは受け入れられない事態なのだ。ところで、そのような心変わりを批判する根拠としてド・ラ・ショー嬢が持ち出したのは正義の論理であった。だが注意して作品を読めば、ド・ラ・ショー嬢はこの論理を別の局面でも用いていることに私たちは気づくだろう。その点について触れてこの節を閉じることにしよう。

『これは作り話ではない』の後半部では、ガルドゥイユに棄てられたド・

¹⁶ *Ibid.*, p.526.

¹⁷ *Ibid.*, p.526.

ラ・ショー嬢の心身の健康を気遣い、彼女に援助を惜しまなかった人物ル・カミュ医師が描かれている。彼のド・ラ・ショー嬢に対する献身ぶりは、丁度彼女のガルドゥイユに対する自己犠牲ぶりと似ている。だからこそド・ラ・ショー嬢はある日、医師に対して次のように語りかけることになる。「ドクター、私があなたに対して抱いている尊敬の念が増さない、ということはありません。私はあなたの親切な御世話に頼り切っています¹⁸。」しかしこの文章で始まる彼女の長いディスコースは、実のところ次のように結ばれることになるのだ。

けれどもあなたは耐えていらっしゃる。そして私はそのことに耐え難い苦痛を感じています。私は、あなた以上に、あなたの求めていらっしゃる幸福に値するようなひとを知りません。そして私は、あなたを幸せにするために率先してしないことなどありません。可能なことは例外なく全てしてさしあげます。さあ、ドクター。いいんですよ・・・そうですとも。私はあなたと寝るところまで行きますわ。そこまではきちんとしてさしあげますわ。あなたは私と寝たいですか？ そうおっしゃればいいだけなんですよ。これがあなたのご助力に対して私がしてさしあげることのできる全てですわ。でも私に愛されたいとお思っているのではないですか。それは私にはできない相談です¹⁹。
(傍点、引用者)

彼女は医師から差し伸べられた助力を負債として認識し、それを返済するためには、医師と「寝る」ことさえ厭わないと発言する。ここで彼女は、受け取ったものに対してそれ相応のものを返すべきであるという正義の論理を提示すると同時に、その論理を根拠として、相手への愛の不可能性を担保しているのである。とするなら、彼女が医師に対して取っているこの関係は、ガルドゥイユが彼女に対して取った関係と、現象上の多少の差異はあれ、構造的にはほぼ同型である。なぜならどちらの関係においても、一方は相手への愛を一切保証していないのだから。さらにいえば、それらのどちらの関係においても、ド・ラ・ショー嬢は愛の問題を正義の位相にすり替えて位置づけようとしているのだから。

与えられたものは返されなければならない。自分はガルドゥイユに愛（の徴）を与えた。だからそれは報いを受けてしかるべきである。また、カミュ医師は自分に愛（の徴）を与えた。だからそれには報いを返さなければならない。この論理は、その枠内に止まる限り、確かに正当性・整合性を持って

¹⁸ Ibid., p.542.

¹⁹ Ibid., p.543.

いるように見える。だが、丁寧に見ればこの整合性が実のところ、彼女の内の確固とした矜持の念、即ち自己愛の存在を証拠だてていることが理解されるだろう。というのも、彼女がル・カミュ医師に対して「寝る」ことをさえ申し出ることができたのは、医師が、その申し出を受けないということをあらかじめ見抜いていたからこそである²⁰。彼女はいずれのケースにおいても正義の論理を適用した。例えば自分が棄てられる立場となった時には、その棄てようとする相手を非難する口実として正義を持ち出した。それに対して、その正義の論理から導き出された負債の感覚に自分自身が悩まされた時には、相手がその負債の返済を迫らないということを予測したうえで、自分の正義の一貫性を示そうとしたのである。この種の一貫性には、利己的な人物像が見え隠れしている。そしてその時、彼女の愛とは、いったい本質的には誰に対して向けられていたのかを問い直してみるべきかもしれない。彼女の過剰な献身ぶりは、自己愛の一形態に過ぎなかったのではないのだろうか、と。

こうして『これは作り話ではない』に描かれる愛のありようは一層複雑怪奇な様相を帯びてくる。かくして本論考の冒頭でも触れたように、二つの作品の冒頭・末尾に登場する雲や霧に関する記述を、これまで検討してきたような愛のとらえどころのなさ、その不定形で曖昧な特質についてのアレゴリーと解釈しうる地平が徐々に整いつつある。とらえることができたかに見えて、すぐに手の内からすり抜けていくこの愛の変異性をめぐって、今度は別の視点から検討することにしよう。

愛と相互所有——『ド・ラ・カルリエール夫人』

いま一度問いを立て直してみよう。『これは作り話ではない』のタニエやド・ラ・ショー嬢が自分の恋人たちに要求したことの、具体的内容とはいったい何だったのだろうか？ この問いへの解答の糸口が、先に見たド・ラ・ショー嬢のガルドウイユに対する詰問のなかには潜んでいるように思われる。彼女が彼の心変わりを非難する際に根拠として掲げた正義の論理は、演繹的に突き詰めれば（厳密に言語化すれば）、互いの存在の相互所有を要求したものの、とみなすことができる。彼女は自分自身をガルドウイユだけのものとして自己規定し、ガルドウイユに「全て」を捧げた。ゆえにガルドウイユも彼女だけのものになるべきである。このような論理を、しかし疑問の余地のな

²⁰ *Ibid.*, p.543. ド・ラ・ショー嬢は語り手に対してそのように説明している。

いほど明瞭に取り上げているのは、実のところ『ド・ラ・カルリエール夫人』において他にない。

そもそもこの作品の主要登場人物ド・ラ・カルリエール夫人については、若くして他者の所有物となった経歴が描かれている。そしてこの所有のテーマは、『これは作り話ではない』において既に前景化されていた諸問題系と交錯する形で浮上してくるのである。具体的に見ていこう。一作目同様に匿名の、語り手と聴き手の対話には次のような箇所がある。「誰が聞いたことがないでしょう。彼女（＝夫人）が年老いた嫉妬深い夫に対して示した限りない心遣いに関する話を。彼女の両親の食欲さが、彼女を十四の年でその老人に捧げることになってしまったのです²¹。」「ド・ラ・カルリエール夫人は最初の夫に対して最も控えめに、そして最も誠実に振る舞いました²²。」

うえの二つの引用から以下のようなことが明らかとなる。第一に夫人は、裕福な老人と富が目当ての両親との間で売り-買いされた。第二に彼女は、この交換の結果、老人との結婚を強いられ、彼の所有物となった。ゆえにこの作品では、前節で見た交換の主題と、所有の主題とが交錯しているのである。夫人は、値段を割り当てられた商品として、自らの意志の及ばぬところで売買取引の対象とされ、ド・ラ・カルリエール氏のものとなる。この老人の「嫉妬深さ」が「最初の夫の暴虐 tyrannie²³」という比喩で言い換えられていることを見れば、夫人が彼の支配の対象ですらあったことが理解されるだろう。老夫は文字通り「専制君主 tyran」として、夫人を相手に自らの所有欲・独占欲を満足させていたのであり、彼女に対する排他的な支配が少しでも揺るがされるようなケース（例えば彼女が他の男と接する機会を持つ場合）にあたっては「嫉妬」を隠さなかったのだ。要するに彼女は、彼だけのものになることを強いられた。対して、夫のほうが彼女だけのものであったかいなか、言い換えれば彼が彼女に対して貞節であったかいなかということは、さしあたって大した問題ではない（その点に関して、作品内では全く触れられていない）。はっきりしているのは、彼女が夫に所属していた代わりに、彼女は夫の所有者であったためしはなかったということである。ここには、一方的な支配-被支配の関係、非対称的な所有-所属の関係が存在している。そして夫人は、そのような関係のもとで「苦痛」を「耐え忍んだ」のである。

²¹ DPV, XII, *Madame de la Carliere*, p.553.

²² *Ibid.*, p.554.

²³ *Ibid.*, p.554. 精確には「最初の夫の暴虐のもとで耐え忍んだ苦痛に関する、まだ新しい思い出は・・・」となっている。

非対称的所有から相互的所有へ。これが、いま一人の主要登場人物デロシュとの結婚に踏み切るうえで夫人が目指した、夫婦関係の理想型である。ところがデロシュは、このような夫婦像とは相容れない気質の持ち主であった。その気質とはつまり、コシト三部作に一貫した主題として見出されるところの、可変性にこそ存していた。実際『ド・ラ・カルリエール夫人』の冒頭部で、対話者たちは、それ自体移り変わりやすい事物としての雲について話題にした直後に、デロシュに関する次のような寸評を行うのである。

吝嗇の父の死に際して莫大な財産の所有者となり、放蕩、色事、そして多様な職業遍歴によって名を馳せた、あのデロシュですか？—そのひと自身です。—あらゆる種類の変身を経験し、そして小さな教会服、裁判所の法服、軍服と、次から次へと着替えたあの狂人ですか？—はい、あの狂人です。—何と彼は変わったことでしょう！²⁴

ここから明らかなように、デロシュは第一に、父の死という偶然的状況によって経済的に裕福な立場の者へと変わった。第二に、「放蕩」や「色事」を尽くす点で、彼は経済・性愛レベルでの「inconstance 浮気＝変わり易さ²⁵」の具現者だった。第三に、彼は「多様な職業遍歴」を通して次々と「変身 métamorphoses」を遂げた。そして第四に、後に触れる悲惨な顛末ゆえに、対話者のひとりの驚嘆にもうかがわれるように、彼はさらに「変わった」。

このように見てくれば、デロシュとド・ラ・カルリエール夫人が、対立する二つの概念を表象する人物たちであることが分かるだろう。前者は可変性を、後者は存在の相互的所有とそのことによる固定的な関係構築を志向しているのである。そしてこの概念的な二項対立に、結婚という制度の問題が折り重なり、事の様相をさらに複雑にしている。『これは作り話ではない』のタニエとレーメル夫人、ガルドゥイユとド・ラ・ショー嬢は、どちらも単なる恋人同士の関係に過ぎなかった。対して、ド・ラ・カルリエール夫人はデロシュの求婚を飲むことでデロシュ姓へと改姓するのだ。結婚による改姓は、女性が夫に所属する立場にあることを不可避的に要請する装置である。言い換えれば、結婚とは、社会的・文化的・政治的・経済的な次元で、所有という観念を、単なる観念として扱うことを不可能にする諸制度のひとつなので

²⁴ *Ibid.*, p.550.

²⁵ この言葉は、ド・ラ・カルリエール夫人の口からデロシュを指して発せられた言葉である。*Ibid.*, p.556: «Si la supériorité de mérite, réelle ou présumée, justifiait l'inconstance, (...)»; «Je ferais tout pour que vous ne soyez pas seulement un inconstant, (...)»

ある。この問題は、第一に作品を通じて夫人自身の名前（彼女の所有する名前）が一度も明らかにされていない事実を思い起こす時、そして第二に彼女がデロシュとの離婚後「未亡人の姓 *son nom de veuve*²⁶」（ド・ラ・カルリエール姓）に戻ることを見る時、極めて重要なものであることが納得されるだろう。夫人は、自身の意図に反して、デロシュとの関係においても彼の夫人であるに過ぎなかったし、またデロシュに所属することを止めた後には、想像的にであれ「暴虐」を極めた「最初の夫」に所属することへと回帰したのである。つまり彼女は、徹頭徹尾所有されるという受け身の立場に立たざるを得なかったのだ²⁷。

デロシュから求婚された当初の夫人は、「その騎士（＝デロシュ）が無数の情事によって作り上げた、軽薄だという評判²⁸」や「最初の夫の暴虐のもとで耐え忍んだ苦痛に関する、まだ新しい思い出²⁹」のために結婚を躊躇する。デロシュと「数年間にわたる親密な関係を続け」、また彼の求婚に対して「無関心ではいらなかった」にも関わらず³⁰。このような経過からも、夫人が可変性に対してばかりでなく、一方的な所有に対しても警戒していたことが読みとれる。存在の相互的所有という主題は、このような概念的対立関係の網目から立ち上がるもののなのだ。しかし所有が相互的なものであるためには、契約が必要となる。実際、遂に結婚に踏み切る決心をした夫人は、結婚式のミサをあげる前夜、両家の親類縁者一同を呼び寄せた上で、彼らの前でデロシュに向かって雄弁をふるうことになる。この雄弁が、露骨なまでに「浮気」を牽制し、夫婦の相互的な結びつきについて触れていることには注目すべき

²⁶ *Ibid.*, p.567.

²⁷ この問題は、ディドロを含む十八世紀哲学において、女性論と密接に関わっている。そしてそれは、生理学的に考察されるべき性の問題、社会的に考察されるべき性の問題という二つの側面を持っている。この両者を統合する結節点に、ポリスの管理・運営上最重要な政治学的課題のひとつである人口政策（「政治算術」）の問題があった。『補遺』は『ダランベールの夢』や『女性について』などと読み合わせる時、そうしたパースペクティヴを獲得するはずである。ところで人口という可変的なもの（「自然」）を管理するという「政治算術」の発想には、逃れがたい逆説が存在している。それは土地の問題にもあてはまる。両者はともに、国家による上からの管理をすり抜けて、「自然」に従う要素を持てしまっているからだ。このことに自覚的だったディドロが、「産め増やせ」を教条に掲げる人口・農地政策を提言した重農主義者たちと取り結んだ関係は、綿密な検討に値する。その試行錯誤の痕跡は『補遺』『ガリアニ擁護』*Apologie de l'abbé Galiani*、『訓令に関する所見』*Observations sur le Nakaz* に刻印されている。

²⁸ *Ibid.*, p.554.

²⁹ *Ibid.*, p.554.

³⁰ *Ibid.*, p.554.

だろう。

デロシュさん、よく聴いて下さい。今日私たちは二人とも自由の身ですが、明日はもはやそうではなくなります。私はあなたの幸福やあなたの不幸の主人となります。あなたは私の幸福や不幸の主人となります。私はよく考えてみました。あなたも同じように真剣に考えて下さい。もしあなたが、今までずっと自分を支配してきた浮気の性分を好んでいるのならば、そしてもし、私があなたのあらゆる欲望を満足させるわけではないならば、結婚はしないでください。あなた自身にかけて、そして私にかけて、お願いします。(中略) 明日、あなたは祭壇の前で、私のものになること、私にしか所属しないことを誓うでしょう。

(中略) 騎士さん、私は自分の体も財産もあなたに委ねるでしょう。自分の意志も自分の考えもあなたに託すでしょう。あなたは私にとってこの世の全てとなるでしょう。けれども、私もあなたにとってこの世の全てとならなければなりません。そうでない限り私は満足できません。思うのですが、私はこの瞬間あなたにとって唯一のものであり、そしてあなたは私にとって確かに唯一のものです。(後略)³¹

夫人のデロシュに対するこの要求は、幾つかの顕著な特徴を宿している。まずこれは、二人の関係が「自由」なものではなく、むしろ拘束的なものとなるべきだという論理に支えられている。つまり夫と妻は厳格な一対一の所属関係の中にあるべきなのだ。とりわけ「あなたの幸福や不幸の主人」、「私にしか所属しない」、「あなたにとって唯一のもの」、「この世の全て」などの表現には、互いの全存在を他を排除した形で所有し合うこと、いなむしろ互いを支配し合うことさえ含意されている。また次に、この要求は、それをデロシュが承認した時点で、契約ないしはそれに準じた意味を持つものとみなされている。確かにその契約が正式なものとして発効されたわけではない。しかし、親類縁者一同を呼び集めて大仰な演説を一席披露したという点で、これは夫婦二人の間の私的な約束という枠をはみ出してしまっているのだ。

物語を読んだ者なら誰でも、この契約がデロシュの「浮気」によって破られるということは知っている。夫人は夫の「浮気」を知って苦しむが、結婚式のミサをあげる前夜同様、再び親類縁者を集めて、デロシュとの離婚を宣言することになる。その後、彼らの離婚にいたる過程・離婚後の顛末などが、世間によって恣に噂され、その絶え間ない噂の増殖を通じて高じた偏見のためにデロシュはリンチに遭うことになる。こうした一連の出来事を話題にしながら作品の語り手や聴き手が示すのは、主に「世間の判断 judgement public」

³¹ *Ibid.*, pp.555-6.

の信憑性に対する強い疑義である³²。しかし「世間の判断」の正否よりも前に、私たちは何よりも、この互いの存在を相互的に所有するという契約の内容自体にいかなる問題も存在しなかったのか、と問うてみる必要がある。というのも二つの点で、デロシュ夫妻の間の契約は、デロシュの「浮気」以前に失効の危機にさらされていたとみなすことができるからだ。

第一に、結婚後の、夫人による出産の問題がある。彼女は、赤子に母乳を与える間、一部のひとびとに共有されていた臆見を踏襲し、デロシュとの同衾を一切拒んでいた³³。彼女が「浮気」をしたということはないにせよ、出産を機に夫婦間の一对一の所属関係にはある種の亀裂が入っていたのだ。相互所有の契約は、それが厳密であればあるほど、子どもという第三の存在によって危機にさらされる可能性を孕んでいるのであり、事実デロシュにとってそれは「長く、そして危険な」ものだった。夫婦の対時的関係は、出産という「自然な」営為を通じて生じる第三項の潜在的な存在ゆえに、常に「既に崩壊の可能性を孕んでいた」のである。

第二に、契約は、契約として認知される時点で、それが破られることを前提にしたものである。言い換えれば、それが破られた時の正義の配分を、そのなかの一条項として盛り込んだものこそが契約としての価値を獲得する。この認識は『ド・ラ・カルリエール夫人』において直接示されているわけではない。しかし少なくとも『補遺』の第四章では、登場人物オルーの口を借りる形で、以下のような思想が語られているのだ。

禁止のあるところではどこでも、ひとがその禁じられていることをしたくなってしまうということは避けられないことだし、また事実ひとは禁じられていることをしてしまうものだ³⁴。

デロシュが「無数の情事によって作り上げた、軽薄だという評判³⁵」を考慮

³² 実のところ、これはそこまで単純な問題ではない。というのも驚見洋一が指摘するように、この作品における匿名の語り手・聴き手も、「世間の判断の一貫性のなさ *inconséquence du jugement public*」を共有している面があるからである。「ディドロの『ラ・カルリエール夫人』を読む」（慶應義塾大学藝文学会、『藝文研究』1986年、第48号所収）を参照。「世間の判断」とは、それ自体この作品の副題としてネジョンが選択したテーマでもあり、別の機会に改めて取り上げたい。

³³ *Ibid.*, p.559: 「彼女は赤ん坊に完全に自分で乳を与えたがった。これは、激しやすい気質を持ち、そしてこうした種類の健康管理にあまり馴れていない青年にとって、長く、そして危険な時期であった。」

³⁴ *Ibid.*, p.621.

³⁵ *Ibid.*, p.554.

した夫人は、彼との間に契約を交わすことによって彼に「浮気」を禁じようとした。しかし、だからこそ彼は「浮気」をしたのである。なぜなら契約とは破られるために（破られた時のために）あるのだから。

かくして所有と可変性との対立では、可変性の側に軍配が挙げられているかに見える。いくら人間関係を固定しようとしても所詮はかない試みに過ぎない。なるほどこれは一面で極めて正しい認識である。実際、後に見るように『補遺』では「浮気 inconstance」を全肯定するタヒチ人が登場することになるからだ。しかし厳密に『ド・ラ・カルリエール夫人』を読めば、事はそれほど単純ではない。というのも、可変性こそが愛の本来的なありようであるという考え方が、作品の根底に存在することは無視し難いにしても、まさしくその愛ゆえに、ド・ラ・カルリエール夫人は所有されるだけの立場に飽きたらず、デロシュとの相互所有の関係を結び結ぼうとしたのであるし、また「浮気」な気質の持ち主であるデロシュも、まさしく愛ゆえに、彼女の側から提出された明らかに拘束的な要求を、一度は全て受け入れ、かつ満足していたのだからだ。しかし翻って、ド・ラ・カルリエール姓に戻った夫人が、その「亡夫」を愛していただろうか？ 彼女は所有され、そして貞節だった。しかし彼女はその「暴虐」の苦痛に耐え忍んだだけだった。ここには第一に、愛と所有との、境界の曖昧な関係性が見出されるだろう。そしてまた、所有によって可能となる関係の拘束・固着性が、愛というとらえどころのない情念ゆえに、一見なものにも捕らわれないかに見える可變的なものとさえ接合されるという、不可思議が存在してもいるのだ。愛ゆえにひとは相手を占有する欲望へと駆り立てられる。しかし相手を所有したからといって、相手の自分に対する愛が不変のまま持続するわけではない。また、いくら自分が相手によって所有される状態に甘んじたからといって、必ずしもそのことのうちに愛があるわけではない。

『これは作り話ではない』に引き続き、『ド・ラ・カルリエール夫人』で描かれる愛もまた、複雑で錯綜した様相を呈している。それは、愛の「本性 nature」が「浮気（＝可変性）」にあるからである、というのがディドロの提出する暫定的な答えである。この分析の正当性は、この作品の対話者のひとりが叫ぶ次の簡潔な言葉によって保証されるだろう。「果たして百人に二人の割合でも、厳密に貞節を通して人間などいるのでしょうか？³⁶」そしてこのような考えを人間学の基礎に据える時、一対一の相互帰属関係を希求す

³⁶ Ibid., p.568.

ることさえも、可変的なものの形態に過ぎないという見方が可能となるのだ。だが、こうした可変性のメカニズムをより明晰に理解するためには、もはや『ド・ラ・カルリエール夫人』にのみ止まるべきではない。むしろそのメカニズムを正面から捉えようとした『補遺』にこそ視線を移さねばならない。

唯物論的浮気と共有——『ブーガンヴィル航海記補遺』

愛を主題として扱う点で一貫しているコント三部作にも、『これは作り話ではない』、『ド・ラ・カルリエール夫人』の二作品と、第三作目の『補遺』との間には、ある明瞭な差異が存在している。前二作があくまでも特定の恋人や夫婦に視点を据えて、彼ら登場人物の私的な生を描こうとしているのだとすれば、『補遺』において扱われているのは、共同体に関わる公的な問題であるからだ。この作品ではもはや、愛はどこか無関係な場所で繰り広げられる個別的な現象としてではなく、共同体の全構成員の生活形態にも影響を及ぼしうる営みとして再把握されているのである。これはまず、出産（再生産）による種の保存・人口増加といった、十八世紀哲学にとっては馴染み深い思想的テーマと密接に関係しているし、さらには、出産された子どもを共同体内の成員の間でどのように配分すべきか、という一種の正義論（倫理的・功利主義的）とも関連性を持っているのである。そしてそれらのプロブレマティックは、ポリスの統治という、当時としては究極の哲学的課題のもとで統合されていた。『補遺』は何より、前二作とは違ってこうした諸問題に正面から取り組んだ作品なのである。

しかしそればかりではない。『補遺』における愛の問題は、唯物論哲学に基礎づけられており、その文脈の中で性のテーマと結びつけられている。この作品の副題は「道徳的観念とは関係のないある種の肉体的行為を、道徳的観念と結びつけることの不都合をめぐる、A と B との対話³⁷」である。ここで「ある種の肉体的行為」とは性交を意味する。男女間の愛の可変性について扱う三部作の第三作目において、副題で掲げられるテーマが「肉体的行為」としての性交となっていることは特筆に値する。実際、『補遺』で描かれるタヒチ人は、愛情のもつれの渦中で悩んだり冷めたりする他の二作品の登場人物たちとは異なり、実に大らかに性を謳歌しているように見える。そしてそ

³⁷ DPV, XII, *Supplément*, p.577: «Dialogue entre A et B sur l'inconvénient d'attacher des idées morales à certaines actions physiques qui n'en comportent pas.»

の野放図な性の享楽は、オルーという人物の口から明かされるように、近親相姦や乱交の肯定へさえつながっているのだ。なるほどこれは「浮気 inconstance」を肯定する立場を積極的に拡張した場合の、必然的帰結ではあるだろう。だが、前二作では取り立てて性交のテーマが扱われているわけではないのに対して、『補遺』ではそれが前面に押し出されている点で明らかに趣を異にしている。とりわけどれほど多くの人間と性交に耽ろうが、それ自体は「道徳」とは無関係なことである、と冒頭から宣言されている点で。

タヒチ人オルーによれば、種を保存し、共同体を最善の状態で管理していくために必要なのは、乱交や近親相姦をも辞さない「浮気」の奨励である。そしてその実践の根拠は、愛の本性、ひいては人間自身の本性が所詮は可変的なものに過ぎない、という認識に存する。ところでオルーに代表されるタヒチ人にとっての可変性の原理は、前二作においてこれとは対立的なものとして捉えられていた所有概念に対して、オルタナティブな関係性を獲得している。このことについて、順を追って検討していこう。

まず「老人による別れの言葉 *Les adieux du vieillard*」と題された第二章では、フランスからの航海者ブーガンヴィルの一行が、タヒチの島を植民地化し住民に対する略奪や殺戮を行ったことをめぐって、タヒチ人の長老による激しい批判が展開されている。このディスクールは、ブーガンヴィルたちによる一方的なタヒチ島占有宣言に対する批判であると同時に、そのような占有の具体的実践を通じて彼らがタヒチ人の思考のなかにもたらした「私のものと君のものという区別」³⁸、つまり「所有権 *propriété*」の観念に対する批判ともなっている。「所有権」の発想を伝えられたために、タヒチ人たちは、それ以前には思いもよらなかった精神的苦痛を発見することになる。彼らは愛と所有欲とを同一視するようになったのだ。彼らは、以前なら両者を明確に区別することができた、いなむしろ所有欲を全く介在させずに可変的な性愛のみをひたすら享受していただけだった。「ここでは、あらゆるものは全ての人間に所属してい」³⁹たのであり、「われわれの娘たちやわれわれの妻たちは、われわれみんなが共有しているものなのだ」⁴⁰。（傍点、引用者）

ここにはディドロの哲学的・文学的賭金がある。というのも他の二作品においてはあれほど分ち難く浸透しあったものとして描いていたはずの、愛と所有の両概念について、『補遺』では、互いの領域を明確に分離して再把握

³⁸ *Ibid.*, p.590.

³⁹ *Ibid.*, p.590.

⁴⁰ *Ibid.*, p.590.

しようとしているからだ。それは仮想空間としてのタヒチを設定するという、思考実験的な手続きを経て初めて可能となった。タヒチでは、愛は所有・占有・支配とは無縁である。もしそれらが関わるとすれば、「共有」というオルタナティブな形態において他にない。この哲学的仮説はしかし、こういつてよければ一種のアイロニーを含意せざるを得ない。なぜなら、まさしく現実にはそのようなことが不可能であるという認識こそが、他の二つのコント作品において描き切られているのだから。ゆえにコント三部作とは、二つの、互いに補完しあう作品の集合体として定位することができるだろう。即ち、一方で『これは作り話ではない』、『ド・ラ・カルリエール夫人』は愛そして人間の私的現実を描いており、他方で『補遺』は、そうした個別的現実とはほど遠いトポス（共同体）で初めて可能な、かつそのような現実に対する絶え間ない批判の根拠ともなる、可変性の原理を開示しているのである。両者の間には、丁度現実と理念、現実と仮説の間に見られる関係のように、一方で埋めることのできない懸隔が存在しているが、同時にまさしくそのような距離感を媒介にして発動し続ける、思考のダイナミズムによって接合されているのである。

確認しよう。『補遺』の第二章「老人による別れの言葉」では、可変性概念と共有概念とを結びつけて考える哲学的仮説が開示された。それを根拠にして「ヨーロッパ」に見られる私的現実の数々は全て批判の射程内に入ることになる。だが作品の第三章では、この問題がより精確に、そして唯物論的に検討されているのだ。物語の設定上では、第三章で展開される二人の人物の対話は、第二章の老人の雄弁よりも前に行われたものなのであるが、思考手続きのレベルでは、明らかに第三章こそが第二章に対する詳しい注釈となっている。

第三章に登場するオルーは、航海者ブーガンヴィルに伴われてタヒチを訪れた司祭を、自分の家に迎え入れて歓待する。彼にとって客の歓待とは、その者に自由気ままな性交の場を提供することを意味している。驚き辞退する司祭に対して、オルーは自分の娘三人と妻を次々と差し出し、また彼女たちも嬉々として司祭と床を共にする。オルーは、なぜ司祭が自分の末娘ティアと夜を明かすことを固辞しようとしたのか理解に苦しみ、性交が行われた翌日に、その理由を尋ねる。司祭は、「宗教」によって自分には性交が禁じられていること、そして貞操すなわち男女間の一対一の帰属関係を守ることは神聖な義務であることを説いて聞かせる。「一人の男は一人の女に所属するの

であり、その女にしか所属しません。一人の女は一人の男に所属するのであり、その男にしか所属しません⁴¹。」この説教自体、性交をした翌日に発せられている点で滑稽な印象を与えるのだが、それに対する答えとしてオルーが展開する以下の議論は興味深い。

（お前の言った特異な掟は）自然に反しているよ。なぜならその掟は、感じ、考え、そして自由な存在が、それと同類の存在の所有物となりうるなどと前提にしているのだからね。そんな権利があるとして、いったい何に基づいているというのかい？ お前の国では、感受性も思考も欲望も意志も持たない物、つまり捨てたり、奪ったり、確保したり、交換したりしても傷ついたり嘆いたりしないような物のことと、決して交換できず、決して所有されたりできない物 *la chose*、つまり自由、意志、欲望を持ち、一時的に身を委ねたり、それを拒んだりしうる、永久的に身を委ねたり、それを拒んだりしうる、そしてその特質を忘れたり自然に暴力をふるったりしない限り商売の対象とはなりえない物のこととを、混同してしまったのだとは、思わないかい？ （お前の言った特異な掟は）存在の一般的な法則にも反しているよ。実際、変化というわれわれの中に備わっているものを禁じ、不変というありえないことを命じ、そして雄と雌をお互いに永久に縛りつけることによって、彼らの本性と自由を侵害する掟以上に狂ったものがあると思うかい？ 貞節、つまり享樂のなかでも最も気まぐれなものを同じ一個人に限定させること以上に狂ったものがあると思うかい？ 一瞬たりとて同じものに止まらない空に面して、いまにも廃墟となりそうな洞窟の下で、粉々になってしまう大岩の下で、ひび割れてしまう木の下で、揺れ動く小石の上で、肉体を持ったふたつの存在が不変性を誓うことほど、狂ったことがあると思うかい？⁴²（傍点、引用者）

オルーの主張は明瞭である。彼によれば、いかなる者も個人の感情、思考、欲望、意志を思い通りに操作することはできないし、個人の存在を所有、独占、支配することはできない。またそれを商売の対象、交換の対象にすることもできない⁴³。なぜなら、自然界の万物がそうであるように、肉体を持つ有限な存在としての人間も、常に生成・変化し続けるからである。存在は「一瞬たりとて同じものに止まらない」。より精確に言えば、生成・変化こそが存

⁴¹ *Ibid.*, p.603.

⁴² *Ibid.*, p.605.

⁴³ デイドロが『百科全書』を編纂していた時期、黒人奴隷制度の問題が知識人の間で取り沙汰されていた。この制度においては、黒人の人身の自由が認められず、しかもその存在は売買取引の対象とされていた。デイドロやジョークールはこれを厳しく批判した。デイドロと『百科全書』については次の研究を参照。Jacques Proust, *Diderot et l'Encyclopédie*, Albin Michel, 1962/1965.

在を規定しているのであって、その逆ではない。

さらに、引用箇所では「感受性」、「思考」、「欲望」、「意志」といった精神作用が「物 la chose」という語を媒介にすることによって唯物論的観点へと接続され、「肉体 chairs」という語を導き出している（もちろん、それと同時に交換可能な「物」と交換不可能な「物」とが峻別される）。さらに「肉体を持ったふたつの存在」（人間の男女）は、空、洞窟、大岩、樹木、小石などの自然界の物質と同等の扱いを受けている。オルーは、人間の性的営みを「物」の運動として捉える立場に立っているのだ。「物」の運動への着目は、当然その「可変性」を肯定することと同義である。要するにオルーにとって、「物」としての「肉体」の変わり易さ、そしてその「肉体」の示す精神的諸反応の変わり易さこそが、「自然」の「法則」に則ったものなのであり、そうした可変的なものを同一不変のままに固持しようとすることは「狂気」の沙汰でしかない⁴⁴。

さて、作品の第五章で展開される A と B の対話は、うえのオルーの主張の根幹を継承しながら、個別的な概念について検討したものだといえるだろう。彼ら対話者は、「自然」に問いただしてみろという名目のもとに、次のようなやりとりを行っている。

A：では、心変わりのないことはどうですか？/B：私はあなたに、オルーが司祭に対していった以上によいことは何もいえないでしょう。それは、自分を知らないふたりの子どもの哀れなうぬぼれであり、彼らを取り巻くあらゆるものの移ろい易さに対して盲目である瞬間に感じる陶酔に過ぎません。/A：では貞節さはどうですか？ これは滅多にない現象ですが。/B：われわれの国ではほとんど常に、誠実な男と誠実な女の、強情と激しい苦痛です。タヒチではこんな

⁴⁴ 十八世紀哲学において、「自然」の「法」は、法則であると同時に規範でもあった。今後この問題に関して、ディドロ作品を通じて接近したい。ところで、ディドロは「所有権」を全否定しているわけではない。いなむしろ個人の「自由」のためにはそれが不可欠だと考えている。「所有権」は、本論考でも繰り返し論じてきたように、他者の存在・身体に対しては決して適用されてはいけな。しかし諸個人は、自己自身の存在・身体に対して不可侵の「所有権」を持つ。そしてそれこそが「自由」の謂いである。二つの概念が相互補完的であるという思想は、「自由と所有権 la liberté et la propriété」という言い回しの反復を通じて、『訓令に関する所見』の中で徹底的に展開されている。この問題が拡張されれば、土地所有をどう捉えればいいのか、といった問いも当然派生してくることになる。このことについても今後研究していきたい。というのも個人の「自由」が、「法」としての「自然」に対していかなる連関を持つのか、ということが、ディドロの思想を理解するにあたって極めて重要なテーマだからである。Voir Gerhardt Stenger, *Nature et Liberté chez Diderot après l'Encyclopédie*, Paris, Universitas, 1994.

ことは妄想に過ぎません。 /A:嫉妬はどうですか?/B:失敗を恐れる、貧しくけちな動物の情念です。人間の不正な感情です。われわれの間違った習俗の帰結、そして感じ、考え、かつ自由な対象にまで拡大された所有権の帰結です⁴⁵。

まず「心変わりのないこと」は、人間本性としての「心変わり」に逆行している。次に「貞節」は、本来何者にも占有されない・されてはならない（なぜならそうなった時、個人の「自由」は失われるのだから）はずの個人が、ある特定の人間に所屬し続けるという点で、「自然」の「法」に反している。そして最後に「嫉妬」は、占有できない・してはならない他者の存在を占有しようとする欲望の「不自然さ」ゆえに、間違っているのである。要するにデイドロは、愛を「肉体」の問題として捉える唯物論的認識に基づきながら、可変性の原理を定位し、同時に、愛にまつわる諸情念の特質について、愛との間に曖昧な（「間違った」）関係性を持つ「所有（欲）」概念を導きの糸としながら分析しているのだ。かくして『補遺』は、ただ登場人物たちの私的現実や諸情念のありようを物語レベルで記述・描写する前二作のコント作品とは異なり、理念-仮説としての「自然」の「法」に立脚しながら（タヒチという表象に託す形で）、あえて厳密な概念操作を貫徹しようとした試みの産物と定義することができよう。

しかしながら『補遺』における愛とその可変性の主題は、実のところさらに複雑な様相を帯びている。というのも第一に、うえに引用した部分にも明らかのように、「嫉妬」の問題が、人間の、他者を所有・支配しようとする傾向の帰結としてのみではなく、「習俗 *moeurs*」の誤りの帰結としても捉えられているからだ。「間違った習俗」は、ただでさえ不必要・不「自然」に拡張されがちな「所有権」の誤謬を、一層拡大してしまう。それは先に指摘したように、例えば結婚制度などに顕著な現象である。自分以外の何らかの存在と、一方的であれ相互的であれ「所有」「所屬」の関係を取り結ぶべきではない個人の人身が、結婚においては、半ば自墮落に侵犯されることになるからだ⁴⁶。

⁴⁵ *Ibid.*, p.632. デイドロが『百科全書』に執筆した項目「浮気 *inconstance*」「嫉妬 *jalousie*」においても、やはり同様の考えが語られている。Voir les articles “Inconstance” et “jalousie” de l'*Encyclopédie*, DPV, VII. 1760年代までのデイドロが、愛人ソフィー・ヴォランとの関係の中で激しい嫉妬にさいなまれていたという事実は興味深い。その痕跡は彼女への書簡集の中に生々しく遺されている。

⁴⁶ しかしそればかりではない。「間違った習俗」の最大の問題は、法との関係性いかに関わっている。デイドロによれば、ヨーロッパには、自然法、市民法、宗教法の「三

第二に、同じ引用部分のすぐ後には

A: したがって、あなたによれば嫉妬は自然ではないということになりますか？

/ B: そうは言ってません。悪徳であろうと徳であろうと、全ては等しく自然なのです⁴⁷。

というやりとりが続いている。ここから、対話者たちが必ずしも「嫉妬」という情念の存在を全否定しているわけではないことが分かるだろう。なぜ彼らは「嫉妬」や「貞節」を「悪徳」として批判しておきながら、一方でそれらの「悪徳」もまた「自然」であるなどという結論を出したのだろうか？

その答えは既に、「可変性」をこそ重視するディドロ哲学のうちに内在している。「嫉妬」のように固着した・狭隘な人間関係を築きやすい情念も、変わりやすさという人間本性と必ずしも矛盾するわけではない。むしろそれらも恒常的に生成・変化していく情念のオルタナティブな形態なのであり、その膠着化しがちな傾向も、本質的には変容する可能性にさらされ続けているのだからだ。だから「嫉妬」という否定的に見える情念も、実は何らかの必然性によって顕在化したものと考えられる⁴⁸。こうして「嫉妬」は「自然」な

つの法」が存在しており、それらが互いに相反する規範として人間存在に課されている。そのためひとは常に何らかの「法」に違反しながら生きていかなければならなくなる。そこから「習俗の欠如」という、国家統治上最悪の問題が帰結する。このような思想は、『補遺』においても極めて大きな比重を占めるテーマであるばかりでなく、他の政治的著作の中でも繰り返し浮上してくるものである。

⁴⁷ *Ibid.*, p.632.

⁴⁸ 「可変性」と「必然性」を結びつけることが恣意的ではないことを示すために、『エムステルホイス反駁』を若干参照しておこう。なるほど決定論哲学を基礎としたこの作品は、より原理的な問題を扱おうとしている点で、コント三部作品とは異なるパースペクティブのもとにあるといえる。しかし、それが 1773 年から 1774 年にかけて執筆されたという事実を見逃してはならない。その時期は、コント作品とりわけ『補遺』の執筆時期と完全に重なっているのだ (*Introduction de la Réfutation d'Hemsterhuis*, éd. Lewinter, t. XI, pp.2-8.)。実際ディドロは『エムステルホイス反駁』において、この世界にあっては何一つとして安定した恒常不変のものは存在しない、という思想を語っている。全てが「移り変わり *vicissitude*」(*Ibid.*, p.28) の中にあるのであり、そうした万物の本性は、常に唯物論的な諸原因に由来している。「私は考える。物質が現在存在しているその形は、必然的かつ決定されたものであり、その物質が引き続き永遠に獲得することになる全ての様々な形もまた、必然的かつ決定されているのである、と。しかしあの移り変わり、永遠の流出のなかにあるあの発展は、必然的である。」(*Ibid.*, p.30-1.) そして全ては必然性によって「結びつけられ、連鎖し、互いに規定されている。」(*Ibid.*, p.53.) ディドロ後期哲学の研究に画期をもたらしたスタンジェによれば、ディドロの考える世界の決定論的因果性とは、決して単線的で平板なものではなく、極めて複雑多様なものである。決定論的世界では原因と結果が様々な仕方入り組ん

ものとみなされる。この論理を同じように適用すれば、「貞節」もまた、可変的な存在としての人間の、ひとつのありようであり、その限りにおいて「自然」なものであると認識できるだろう。

人間は可変的な存在である。『これは作り話ではない』『ド・ラ・カルリエール夫人』においては、幾人かの個人の愛の可変性が描かれており、『補遺』では、このような事態が「自然法則」、即ち人間の「本性 nature」として再把握されている。法則は、人間の手によって変えることのできないものであるからこそ法則たりうる。しかし人間は、「所有」「交換」「正義」といった様々な観念や論理を産み出すことによって、さらには「間違った習俗」を適用することによって、この「法」を歪める方向に進みがちなものである。だからこそ、愛と所有・交換とが区別されることが「自然」であるにも関わらず、現実にはそうでない場面が無数に存在するのである。このディドロの思想を展開すれば、「本性」を歪めようとする「本性」といった逆説が、人間存在には不可避免的に付いて回るのだと結論づけてもいいはずだ。『補遺』において、諸個人の私的現実とは鋭く対立する仮想的な場所としてのタヒチが描かれたことには、このような文脈が付随していると思われる。

ディドロのコント三部作には、以下のような特徴がある。第一に、愛と所有・交換・正義との関係性をめぐって、一方で現実におけるそれらの境界の曖昧さを示すと同時に、他方でその間を一旦切断して認識しようとした。第二に、可変性の問題を、唯物論的思考によって人間身体、そして性の問題へと接合した。そして第三に、以上の二つの省察を折り重ねることで、全構成員を全構成員が性愛レベルで共有するという、實在不可能な共同体像を構想した。このような思考過程の内には、現実と理念の狭間を往還するディドロ思想のダイナミズムが見出される。

しかし「自然」は、本当にタヒチのようなものとして表象されうるのだろうか？ そうでないとすれば、「間違った習俗」の具体的内容とは何であり、それが「間違い」であることを判断する基準とは何なのか？ また個人の「所

で関係しあい、しばしば哲学者の認識能力をもってしても把握することが困難であるほどに多様な諸関係が存在する。しかも全てが変化している以上、常にその諸関係は流動的・可変的となる。世界は固体的モデルによってではなく、流体的なモデルによってとらえられるべき、変化に富んだものののだ。Voir Gerhardt Stenger, *Nature et liberté chez Diderot après l'Encyclopédie*, Universitas, 1994, p.212.

有権」は、共同体の問題を考察するにあたって、いかなる位置づけを獲得するのだろうか？ 可変性の原理を根底に据えながらも、こうした具体的問題点についてディドロは決して無視してはいなかった。いささか性急な断言を敢えてするならば、こうしたことは作品の内容面を見るだけでは明らかにならないだろう。何よりディドロ作品では、その複雑な形式（語りの構造）にこそ、高い思想性が込められているからだ。そのことについて今後徐々に検討していきたい。